

テーマ「スマホ時代でも変わらない子どもたちとのかかわり方
～ネットを取り巻く状況とトラブルの未然防止に向けて～」

講師：竹内 和雄（兵庫県立大学 准教授）

1 自己紹介

(1) 経歴

寝屋川市で20年間中学校教員として勤務し、その後5年間指導主事として勤めた。現在は兵庫県立大学にて教員志望の学生達を対象に教鞭を執り、研究室で小学生のスマホの問題に関する指導案を作成する傍ら、文部科学省（以下、文科省と略）や総務省の委員を勤めている。また、テレビ出演（クローズアップ現代）もしながら毎週火曜日、毎日新聞に記事を連載している（スマホっ子の風景）。自作の「情報化社会のためのネットの使い方」動画についても参考に・・・。

(2) 現職に就いた経緯

ある学校での事件の犯人が教え子であった。その頃からスマートフォン（以下、スマホと略）の問題にかかわり始めた。数年後、勤務校に当時被害に遭った学級の児童達が入学してくると、生徒指導が大変困難になった。トラブルは中々減らず、原因をつきとめていくと携帯電話（以下、ケータイと略）に辿り着いた。

当時の1年生（事件を経験した子ども達）の携帯の所持率は2・3年生が2割程度だったのに対し、8割を越えていた。夜中泣いたりすることが続いたため「何かあったらこれで」と母親達が携帯を持たせており、その使用によって大きなトラブルが起こっていた。

ケータイの研究者と言われることが多いが、全くの逆である。困った子ども達の対応をしていると、たまたまケータイの問題と向き合うことになった。不登校のことを考えていくと、たまたまスマホのことに・・・。現在、子ども達の間で起こっているトラブルの原因は、ほとんどがスマホである。

2 現在の子ども達

(1) 将来の夢（小学4年生男子の一部；聞き取りより）

驚くことにユーチューバーが第3位で、第1位はサッカー選手、第2位は医者、第4位は公務員であった。ユーチューブについて詳しいことは公表されていないが、動画が1回再生されるごとに0.1円の収入となるそうである。兵庫県内（以下、県内と略）の小学生達はユーチューブが大好きで、ある例によると自分達でユーチューブクラブを作り、全然勉強せずに放課後ずっと動画をアップロード（以下、アップと略）している。

「僕達はユーチューバーになる。だから勉強なんてしなくていい」「最近ビューが上がっている。よく見てもらえる動画は3種類で、危険なこと、面白いこと、エッチなこと」「みんなやっている。何で俺だけアカンの？」という子ども達の言葉である。

情報化の時代、子ども達に何かを伝えていく際には、ある程度証拠を示さないと理解させることが困難になっている。そうした背景の中、特に不登校生はスマホとは切っても切れない状況にあり、情報をよく調べて知っている。

(2) 取り巻く環境

ある小学生達がLINE上で「イスラム国に関する動画」を真似た動画のやりとりをすると、日本中の子ども達に出回った。当初「LINEなので表に出ないから大丈夫」と言っていた。ところが、友達が画面をスクリーンショット（以下、スクショと略）で撮影してTwitterにアップした。顔にモザイクをかけ名札も消してあったため、学校名も名前も分からないはずであったが、制服からすぐに特定されてしまった。

ある高校生が自身の写真を撮って「分かるか？」とアップすると、直ぐに名前までもが特定された。GPSを切り名札を消していたが、名前の縫い込みから調べられた。その後、学校名が分かり、出身中学校を検索して卒業アルバムがネット上に流出した。この生徒は進路にまで影響した。

特定に時間を費やす暇な人間が存在する。

最近、テレビではTwitterの投稿や写真の話題をあまり言わなくなっている。新聞社も「またか」と記事が読まれなくなるため取り上げていない。しかし、依然として事例はたくさんあり、特に小学生が顔やおしりを出したり、飛び降りたり、スカートめくりをしたりしている動画の使用が一番多い。

県内の小学生達はスマホではなく、ほとんどがDSからインターネット（以下、ネットと略）に接続している。「何故するのか？」と高校生に尋ねると「小学生達は『寂しいのでは？』『多分リアルが上手くいってない』『ネットにしか逃げ場がない』『取り上げてはいけない。他の子もしてしまう』『リアルではじかれたら、始めてしまうのでは？』」と答えた。つまり「ネットは逃げ場であり、主戦場ではない」「本当はリアルが面白いけれど、使ってしまう」と子ども達は答えている。次の用語をどの程度知っているか？

- ・ガラケー（ガラパゴス携帯）
- ・スマホ（スマートフォン）
- ・ツイキャス（ツイートキャストイング）
- ・フルフル（LINEでスマホを振ると友達になれる）
- ・チュープリ（キスしているシーンのプリクラ）
- ・ミクチャ（ミックスチャンネル）
- ・出会い系（スマ友）

※不登校生は友達がいないと利用して見付けようとする。両親が出会い系サイトで知り合ったという場合もあるため、不用意に「ダメ」と伝えてはいけない。「子どもはダメだよ」という表現で伝えるよう留意する。

(3) 今の不登校生像

ア 昔の不登校生

すぐにマンガは読み飽き、レンタルビデオは見てしまう。ゲームもすぐに全部クリアし、最初から何分でも達成できるかにも挑戦して飽きてしまう。友達は誰もおらず、暗くて寂しい思いをしている。

イ 今の不登校生

マンガ、ビデオ、ゲームはネット上に無限にある。友達はネット上にたくさんいる。あっけらかんとして明るい場合が多く「ネットに逃げたら、ネットでは何とかかな」と考えている。でも「本当は楽しくない」という思いも持っている。

以前は人と出会うことが一番の登校刺激になったが、現在は楽しい思いができるので「面白くない学校に行くくらいなら、ネットの方がまし」となってしまう。ネットより面白い現実を作らないといけない点が中々難しい。ネットは面白い。なぜならクリアするともものすごく盛大な音で褒めてくれ、たくさんボーナスをくれるからである。毎日「俺って最高！」という気分が味わえる。最高でない時は課金すれば成績がドンドン上がっていく。リアルで褒めてもらおうと思えば、テストで点数を上げないといけない。成績が上がっても〇〇君と比べられ「まだまだや」と言われたりして褒めてもらえる機会が中々ない。

学校に好きな時にフラ〜ッとやって来るのは、彼らなりに必然性があるからなのである。ゲーム上のダンジョン（冒険の舞台で謎や宝等が隠されている場面）が何もない時やゲームが何もない時、ネット上の色々な人と申し合わせて「いついつ行くな」と言って来ている。不登校の子がたまたま鉢合わせるのはそういった場合である。「いついつ来い」と言ってくれる子がいたり、LINEで「おいで」と言われて来る子もいる。

3 諸活動から

(1) 学校安全に関する講義

ア 概要

今年7月25日、普段はネットやいじめの問題で呼ばれることが多いが、文科省からの要請で中央教育審議会にて学校安全の講義をすることになった。子ども達の身の安全を脅かす津波や震災と同程度のものと判断した「ポケモンGO」についてである。予想された程影響は出ていないが、新任の先生（20歳代前半：第1世代）の多くが課金している実情があった。子どもの頃に遊んでいた以前のキャラクターが登場してくるので面白く、こっそりとしている場合が多い。ターゲットとしているのは子ども達ではなく、お金を持っている年代なのである。今後、テレビ局とのタイアップで新しいシリーズが開始される予定である。今のポケモンGOは交換もバトルもできないためゲームとしては面白くない。可能となればお金が動くことになる。ゲーム企業が子ども達をターゲットにすると大変なことになってしまうことが危惧される。

イ ポケモンGOの実際

街の様々な場所にキャラクターがいて、たくさんの小学生から大学生の人達が捕まえにやって来る。ゲー

マーがたくさんいる地域に多く出現し、残念ながら県内には非常にたくさんのポケストップがある。勤務校付近にポケストップがあるかについての情報を把握することは、動向を掴む上で重要である。企業の視点に立つと「いかにゲームにログインする人を増やして儲けるか」に必死である。戦略会議を開いてはゲームの中にダンジョン等面白いイベントを次々と考え出している。今後、授業中にする子どもが現れ、数年後に授業が成立しない等指導上困難な事案が出てくる可能性がある。

(2) ネット断食キャンプ

ア キャンプの様子

8月16日から20日の期間、県内の無人島でネット依存の児童生徒達を対象に合宿を開催し、普段のリアル(料理、スイカ割り、カヌー、鬼ごっこ等)を徹底的に実施した。その中で子ども達に「1日1時間だけ職員の部屋でスマホが使える。けどどうしようか?」と条件を付けた。参加者13人のうち12人は部屋に来ることはなかった。「走り回る方が面白い。すごく自信がついた」との感想があった。

A君は「やることがない。行っても面白くない」と輪の中に入らず部屋にやって来る。家に帰ってからどんなルールを作るか等について度々面談した。1日18時間ほどスマホを使用している(少な目の時間を言っただけで嘘をつく)とのことである。不登校生のほとんどはこういう生活を送っている。

そうした状況の中でA君にターニングポイントが訪れた。料理の時間に友達とトラブルになった。通常なら家に帰るところであるが、帰ることができず、このままではご飯を食べることができない。すると、ボランティアの学生や子ども達がかかわり続ける中で、遂に友達に謝ったのである。その後は一緒に活動に参加するようになった。A君は「トラブルがあれば、リセットボタンを押せば良い」という経験をした。今までリセットボタンを押せていなかったのである。

イ キャンプを通して

「周りに面白いことがあればスマホをやらない。やりたくない」それが分かっただけでも十分な収穫であった。本人達は「帰ってからのルールを作りたい。今のままではダメだ。本当はしんどい、眠たい」と思っている。時代は変わってきており、スマホの使用について単に「賛成!」「反対!」とするのではなく、方法について考えていく耳を持つようにしていかなければ子ども達がどんどん離れていってしまう。ただし「子どもが言うから」となし崩しにしては絶対にいけない。場合によっては「ダメ!」壁になって「絶対アカン!」と伝える力も必要である。

4 メールトラブルの実例

(1) Bさんの例(16人のグループチャット)

友達のぬいぐるみの画像を見てコメント→このぬいぐるみかわいくない(?を付け忘れた)

翌日、学校で全員から無視されて不登校になった。昔ならば「失礼なこと言わないで」と直接会話して誤解を解いたが、今はネット上でスパッと切る。Bさんを退会させて証拠が残るようなリスクなことはせず、Bさん以外の15人で新しいグループを作り「最近、あの子調子に乗ってる」「そうそう、それ」との会話が始まる。「これっていじめ?」「いじめと違う?」「いじめやね」という状況となって対応が非常に難しい。

(2) 方言による伝わり方の違い

言葉が荒いためにトラブルが多く発生するのは大阪、播州、広島、北九州、博多である。例えば「われ、脳天かち割るぞ」とLINEで言われると腹が立つ。その言葉をスクショして「こんなこと言われた」と友達に言う。「なにー」となってケンカが起こる。そのため学校に来れなくなったという事例が多発している。

5 まとめ

「スマホ、スマホ言うけど大したことない。スマホより面白いことがあったらしない」と子ども達は分かっている。一番のスマホ対策、不登校対策は「楽しいクラスを作ること。楽しい授業をすること。いい友達を作ること。相談できる先生がいること」である。

スマホの問題は心の問題であり、心で受け止めてあげると何も難しくない。子ども達に歩み寄って一緒に考えると非常に喜ぶ。「フルフル、ミクチャ」と言われるとドキッとすが、実は知らなくていい。信頼関係ができれば子ども達から教えてくれる。まず全部を受け入れることである。全部受け入れてもらえたら「そんなのアカン」と伝えて欲しい。受け入れられる前に言うと、彼らは聞けない。

一見、昔よりも難しく思えるが、非常に簡単なことである。

そういう大人に私達がならないといけない。なっていくべきである。